創始者の哀しみ
——オーギュスト・コント——

奥　井　智　之

The Sorrows of the Founding Father
—— Comte ——

Tomoyuki Okui

Abstract

Auguste Comte is usually regarded as the founding father of sociology. He lived in the chaotic age after the French Revolution and offered an original social theory he called "sociology." It is the most important theoretical breakthrough to establish a new discipline. But his social theory is not held in high esteem today, and he wears an air of sorrow in the history of sociology. In this paper, I review his checkered life and his magnificent theory. Through this approach, I intend to show that he is undoubtedly a sociologist of our age. (I am planning a new book on the history of sociology. This paper corresponds to the second chapter of the new book.)

革命勃発

J. P. エッカーマンの『ゲーテとの対話』の 1830 年 8 月 2 日の項には、次のような件(くだり)がある。パリで七月革命が勃発したという報に接して、エッカーマンがゲーテの下を訪ねる。ゲーテが切り出す。「君は、この大事件についてどう思うかい？　火山は爆発した。すべては火中にある。もはや非公開で談判するようなときではないよ！」と。エッカーマンが「恐るべき出来事です！　しかし、情勢はよく知られている通りですし、ああいう内閣では、これまでの王家を追放して、事を収めるよりほかに手はないで

しょう」と応じると、ゲーテはこう述べたという。「どうも、とんちんかんだ、君。わたしが話しているのは、あんな連中のことじゃないよ。……わたしは、学士院（アカデミー）で公然と持ち上がったキュヴィエとジョフロア・ド・サン＝ティレールの間の論争のことをいっているのだよ！」と。この意外な言葉に「二、三分間すっかり思考が停止してしまった」と、エッカーマンは書いている。

ここでいうキュヴィエとサン＝ティレールの論争とは、パリ学士院での「種の進化」をめぐる二人の論争をさす。ゲーテは「変態」という概念を提示したことで、進化説の先駆者ともいわれる。つまりはかれ自身が、一人の自然科学者であった。したがってかれが、パリでの学問的論争に多大な関心を寄せていたとしても何ら不思議ではない（ゲーテは種の可変性を主張する、サン＝ティレールの支持者であった）。しかしまたそこでのゲーテの発言が、パリでの政治的動乱を前提とするものであったことも明らかである。――革命勃発の報が届いて「すべてが興奮の坩堝（るつぼ）に投げ込まれた」と、エッカーマンは書いている。そしてエッカーマン自身が、そのような革命熱にのぼせ上がっていた。その際ゲーテは、周囲の革命熱とことさら距離をおこうとしているように見える。こういってもよいであろう。ゲーテは政治的無関心を装うことで、かえってかれ自身の政治的姿勢を明らかにしている、と。

それではゲーテは、パリでの革命についていかなる見解をもっていたか。その際『ゲーテとの対話』の 1830 年 3 月 14 日の項は、大いに参考になる。かれはそこでこういっている。「いかなる革命の場合にも、極端になるのは避けがたい。政治革命の場合、人々は最初、さまざまな不法を是正することだけを要求する。しかしあっという間に、流血の惨事に突っ込んでしまう」と（以上、山下肇訳）。そこでは元々、フランスでの文学革命（具体的には急進ロマン派の台頭）が話題になっている。政治革命はそれとの類比において、わずかに語られているにすぎない。しかしここには、革命一般とりわけフランスでの政治革命に対するゲーテの姿勢がよく示されている。

かれは革命が、悪政にストップをかけるのに役立つことは認めている。しかしまたそれが、極端な結果を招かずにはすまないことに懸念を示している。それは革命が、大衆の要求を背景にしているからであるというのがそこでのかれの見解である。

これらの発言はゲーテの最晩年の、八十代のものである。わたしたちはそこに、老人特有の保守的な世界観を読み取ることもできるであろう。しかしまたそこに示される社会観は、プラトン以降の知的伝統[1)]に属するものである。一般にゲーテは、社会科学者とも社会思想家とも見なされてはいない。しかしかれが、そのような知的伝統のなかにあったことは認められてよい。何もそれは、ゲーテに限った話ではない。1789年のフランス革命に端を発し、1830年の七月革命を経て、1848年の二月革命にいたるフランスでの政治的動乱（わたしたちはそれを、広義のフランス革命と呼んでもよい）は、社会科学や社会思想の領域に大きな痕跡を残している。たとえばイギリスの政治家・思想家のE. バークは、早くもフランス革命勃発の翌年に『フランス革命についての省察』を著した。バークはそこで、フランス革命を「これまで世界で起こったなかで最も驚愕すべき事件」といっている。

バークは（フランス革命を支持する論敵の見解を借りながら）フランス革命の原理をこう要約する。「わたしたち自身の統治者を選出し、その不法行為を理由にかれらを放逐し、わたしたち自身のために政府を形成する」ものである、と。すなわちそれは、純粋な民主制といってよい。バークはそれを、一つの狂信ととらえている。かれにとって人民とは、「豚」のような存在であった。そしてまたかれらを担い手とする革命は、コミュニティ的な秩序を破壊し、社会的な混沌をもたらすものであった。一般にバークは、保守主義の思想家とされている。必ずしもここで、かれの思想の是非を問題にしたいわけではない。ここではフランス革命をめぐるかれの所見が、伝統的な社会観の枠内にあることを確認したいだけである。そしてそれは、社会学の誕生にとっても無縁のものではない。というのも固

有の意味での社会学は、そのようなフランス革命をめぐる議論の渦中で産声をあげたからである。

社会学の存在理由

パーソンズが『社会的行為の構造』の冒頭、「今日だれがスペンサーを読むだろうか？」という一文を引用し、H. スペンサーの学問的な死に言及したことはよく知られている。パーソンズがそこでいわんとするのは、スペンサー流の進化論的ならびに原子論的な社会理論が今日（といっても1930年代のことであるが）流行（はや）らなくなってきているということであった。もっともそれを、ごく単純に「スペンサーが最近読まれなくなってきている」と解したとしても大差はない。社会学的な知識もそれ自体、一つの商品である。したがってそれが、流行と無関係でいられるはずはないのである。パーソンズの顰（ひそ）みにならってわたしたちは、「今日だれがコントを読むだろうか？」と問うてもよいかもしれない。コントは社会学の創始者として（より正確には「社会学」という言葉の創案者として）、社会学の入門的な授業などで結構言及される人物である。しかしそれは、ただそれだけの話である。

たとえば社会学の演習で、コントが取り上げられるという話は聞いたためしがない。何もそれは、最近の話でもない。清水幾太郎は1920年代の社会学界の状況を回想して、こういっている。コントを一ページも読んだことのない者までもが、コントを嘲笑していた、と（『オーギュスト・コント』）。当時はジンメル流の「形式社会学」の全盛時代であり、コント流の「綜合社会学」は旧式のものと思われていた、というのがそこでの文脈である。「形式社会学」や「綜合社会学」の何であるかは、のちに扱うことにしよう[2)]。ここではコントが、ずっと以前から流行遅れになっていたことを確認できれば十分である。さきにも書くように[3)]社会学の歴史そのものが、理論的な突破（ブレイクスルー）の歴史である。したがって新規の理論が打ち出されることで、旧来の理論が古びて見えることにはやむをえない一面がある。その意

味ではコントの書物が、図書館の書庫で眠ることになったとしても何ら不思議ではない。

わたしがここで、コントに一章を割くことにしたのはなぜか[4]。必ずしもそれは、社会学の創始者としてのコントに相応の敬意を払いたいためではない。あるいはまたかれの理論が、今日でも何らかの意味で有効であるといいたいためでもない。かりにも一つの学問を創始することは、最大の理論的な突破といってよい。——その意味ではかれの理論のなかには、社会学の存在理由(レゾンデートル)が隠されているかもしれない。それはコントの理論が有効か無効かということとは別に、「社会学とは何か」という問いに関わるものである。そのことを問うことが、ここでのわたしの目的である。コントは1798年（フランス革命後の総裁政府の時代）に、地中海に近いフランス南部の都市モンペリエに生まれた。かれの正式の姓名は長く、イジドール・オーギュスト・マリ・フランソワ＝グザヴィエ・コントという。両親が熱心なカトリック信者で、三人の聖人と聖母マリアの名をもらったことが、その由来である。

父コントは収税吏（中級官吏）で、王党派であった。コントは地元のリセ（フランス革命後に設けられた中等教育機関）の寄宿舎に入り、そこを優秀な成績で卒(お)えた。そして1814年、パリのエコール・ポリテクニック（同じく革命後に設けられた理工系エリート養成のための高等教育機関）に進んだ。このころまでにコントは、すっかりカトリックの信仰を捨て、革命派に転じていた。いつの時代も若者は、革命熱に浮かされやすい存在であろう。しかしコントの生まれ育った時代が、革命後の動乱の時代であったことには注意が必要である。コントが生まれた翌年には、ナポレオンが統領政府を樹立している。ナポレオンはやがて、皇帝となる。しかし1814年、退位を余儀なくされる（ブルボン王朝が復活）。コントがエコール・ポリテクニークに進んだのは、同じ年である。そして翌年は、ナポレオンの復位と三ヶ月余りでの再退位という出来事が続いている（ブルボン王朝が再復活）。

革命はまさに、ゲーテのいう「流血の惨事」を招いていた。そこではだ

れもが、何らかの政治的立場をとることを強いられた。さきに取り上げたフーシェのように[5]、そのことを好機ととらえる人物もなくはなかったであろう。しかし大多数の人々にとっては、それはむしろ危機として映ったであろう。概ねそれが、コントの生まれ育った時代であった。変革の時代を生きた人間が、二つの時代を経験するというのはそう珍しいことではない。たとえば福沢諭吉は、明治維新を経験した自分の半生についてこう書いた。「恰(あたか)も一身にして二生を経るが如く一人にして両身あるが如し」(『文明論之概略』)と。おそらくそれは、コントの経験とも相通じるものであったであろう。その際福沢やコントが直面したのは、自分たちが生きている社会をどうとらえるかという問題であった。と同時に目前の社会的混乱をどう収束させるか、という問題であった。明らかにそれは、一つの社会学的問題であった。

市井の哲学者

エコール・ポリテクニークでの教育は数学・物理学・化学などの、理数系科目が中心であった。コントはそれらの課業で、すこぶる優秀な成績を収めていた。同時にかれは、人文・社会系の書物を読みふけるようになる。1816年(十八歳のとき)コントは、素行不良(復習教師に非礼な態度をとったこと)を理由にエコール・ポリテクニークを退学になる。翌年コントは、そこに復学する機会を得る。しかし復学することなく、自由な学問生活に入る。わたしはいま、かれの学問生活を「自由」と形容した。しかしそれを、そう単純に形容するだけでは誤解を招きかねない。少なくともコントを、今日の社会学者の範疇でとらえることには無理がある。今日の社会学者は一般に、大学に属している。——しかしコントは、終生市井(しせい)の哲学者であった。コントが大学教授の椅子を得ようと、種々の運動をしなかったわけではない。しかしそれは、社会学ではなく数学や物理学の教授の椅子であった。

それは当時、まだ「社会学」という学問分野が存在しなかったからであ

る。それではコントは、何で生計の資を得ていたのか。かれはのちに、エコール・ポリテクニークの復習教師（助教員）や入学試験官を務めている。しかし基本的には、終生数学の個人教授で生計の資を得ていた。今日でも研究者の卵は、概ねそれに類するアルバイトをしている。ただしそれが、終生続くとなると話は別である。コントがアルバイトで生計を立てていたというのは、かれの特異な性格と無縁ではない。それはかれが、エコール・ポリテクニークへの復学を拒んだことにも示されている。しかしまたかれが、社会学の創始者であることもそれと関係している。というのも既存の学問に縛られた人間が、新しい学問を創成することなどできはしないからである。その意味でコントの学問生活を、「自由」と形容してもよいであろう。しかしコントが、終生貧困に苦しんだこともここで強調しておかなければならない。

下宿のアパートメントで数学を教えながら、哲学的な著述に励むというのがかれの基本的な学問生活であった。コントの学問生活を語る上でもう一つ落とすことができないのは、女性との関係である。あらかじめ断っておくならば本書[6]で取り上げる社会学者のほぼ全員が、男性である。そのこと自体が一つの偏見である、という女性学的なものの見かたもありえよう。しかし社会学史の主潮が、もっぱら男性によってかたちづくられてきたことは紛れもない事実である。その際有力な男性社会学者が、女性といかなる交渉をもったのかということは興味ある問題である。というのもそこに、その社会学者の世界観が映し出される可能性もあるからである。さてコントは、地方から都会へ遊学してくる。そして下宿生活をしながら、学業に従事している。コントの場合それが、一生続くというのは特異である。しかし知識人の卵が、都会で下宿生活をするということ自体はきわめて一般的な経験である。

さしあたりそれは、自由な個人を生み出す契機となる。同時にそこから、自由な個人が相互に結合する可能性もまた生じる。おそらく恋愛関係も、そのような結合の一つとして位置づけられるであろう。コントは二十七歳

のときに、カロリーヌ・マッサンという女性と結婚する。相手は元セックスワーカーで、二十二歳であった。コントはセックスワーカーとしてのかの女に出会い、その後二人の間に恋愛関係が生じた。数学の個人教授と元セックスワーカーの二人の結婚生活は、けっして安定したものではなかった。その原因の一つは経済問題で、コントの収入は家計を維持していくのに十分なものではなかった。間もなくコント夫人は、長期・短期の家出を繰り返すようになる（その間かの女は、元の仕事をしていたともいわれる）。コントは精神異常に陥り、二十九歳のときには投身自殺も図っている（未遂）。二人の結婚生活はコントが四十四歳のときに、最終的な別居に入ることで終わった。

のちにコントは、この結婚のことを「人生最大の失敗」と書いている。ともあれコントは、この結婚生活の間に『実証哲学講義』全六巻を著している。コントは妻との最終的な別居の二年後に、クロティルド・ド・ヴォーという女性と知り合う（そのときコントは四十六歳、ド・ヴォー夫人は二十九歳であった）。かの女は陸軍軍人（のち将軍）の娘に生まれ、収税吏のド・ヴォーの妻となった。しかし当時、夫は公金横領の罪を逃れて海外に逃亡中であった。かの女は才色兼備をもって知られ、同時に胸を患っていた。翌年コントは、クロティルドに求愛する。それに対するクロティルドの反応は、むしろ友情に近いものであった。ともあれコントは、その年を「比類なき年」と呼んでいる。コントとの濃密な交流の末にクロティルドは、その翌年に亡くなる。この間コントのなかで、クロティルドは次第に聖化されていく。これがコントの後半生を彩る、クロティルドとの交流のあらましである。

学問の終局的方式

コントの主著は『実証哲学講義』（1830-42年）とともに、『実証政治体系』全四巻（1851-54年）であるといわれる。しかしここでは、初期の論文『社会再組織に必要な科学的作業のプラン』（1822年）を取り上げるこ

とにしたい。というのもそこには、かれの理論的立場が凝縮されているように思われるからである。コントは1817年から24年まで、サン＝シモンの秘書をしていた（サン＝シモンが経済的に困窮していたので俸給を辞退した）。サン＝シモンは貴族出身で、アメリカ独立戦争に従軍し、フランス革命後は著述家として活動していた。1823年サン＝シモンは、ピストルによる自殺未遂の末に隻眼（せきがん）を失う。その直後にかれが著したのが、主著『産業者の教理問答』全四分冊（1823-24年）である。それはコントが、サン＝シモンの秘書を務めていた時期の作品である。のみならず『産業者の教理問答』の第三分冊は、コントの名で発表されている。

その第三分冊の序文でサン＝シモンは、コントを批判した。これがコントの、サン＝シモンからの離反の一つの契機となった。しかしコントが、サン＝シモンから多大な影響を受けたことは事実である。たとえばコントの実証主義ならびに産業主義は、明らかにサン＝シモンを媒介としている。しかしそれを一つの学問的立場に体系化したのは、コントの業績といわねばならない。さて『プラン』の冒頭、コントは「現代」の基本的性格をこういう。一つの社会組織が解体し、もう一つの新しい社会組織が形成されようとしている、と。あるいはまた組織破壊と組織再建という、二つの正反対の動きがあるのが「現代」である、と。そのような状況をコントは、一つの危機としてとらえている。これが興味深いのはそこに、社会学の基本的な前提が表明されているように思われるからである。すなわち社会が、秩序と混沌（反秩序）の二面性をもつというのは社会学の基本的な前提であり続けてきた。

ある意味では社会学とは、そのような社会の二面性をどう解釈するかをめぐる競技会（コンペティション）である。それではコントは、より具体的に「現代」をどうとらえたか。かれは旧組織のことを、封建的・神学的組織と呼んでいる。そしてそれが、フランス革命によって破壊されたという。しかしフランス革命は、破壊の原理であって建設の原理ではない。したがって目下の無政府状態を解消するために、社会を再組織しなければならないというのがコン

トの主張である。その際コントが、かれのいう社会再組織の担い手と考えていた勢力は何か。かれは社会再組織には、理論的・精神的側面と実践的・世俗的側面とがあるという。とりわけコントは、前者の理論的・精神的側面を重視する。というのも「社会」の目標を明確にせずに、そのメンバーを組織することはできないからである。その上でコントは、新組織の精神的権力は科学者の、世俗的権力は産業者の手にそれぞれ握られることになると予想している。

ここでコントが、科学者の役割を重視していることもまた興味をひく。それはコントが、理論の役割を重視しているからである。かれはこういう。工場の経営、橋梁の建設、船舶の航行などが理論的知識を前提とすることは、広く認められている。社会の組織もまたそれと何ら選ぶところのない、理論的作業を含む、と。その作業の担い手としてかれが想定していたのが、科学者であった。社会の組織の前提として理論的知識を重視するというのは、コントの社会理論の一つの特徴をなす。それは『プラン』で示される、「三段階の法則」でも明らかである。それは人間の知識が、神学的・形而上学的・実証的の三段階を経て発展するというものである。第一段階では超自然的観念が、事実を関連づけるのに用いられる。第二段階は第一段階から第三段階への、過渡期として位置づけられる。そこでは事実を関連づけるのに、「完全に超自然的ではないが、完全に自然的でもない観念」が用いられる。

第一段階が虚構の段階であるのに対して、第二段階は抽象の段階ともいわれる。形而上学（metaphysics）は本来、アリストテレスの第一哲学をさす言葉である。これはアリストテレスの遺稿編集に際して、第一哲学が自然学（physics）の後（meta）におかれたことに由来する。そこから存在の根本原因を探究する哲学のことを、形而上学と呼ぶようになった。コントはそれが、抽象的な推論に基づく学問にすぎないという。——それに対して学問の終局的方式として、かれが規定するのが第三段階である。コントはそれを、科学の段階ともいう。この段階では事実を関連づけるのは、事

実によって確認される観念や法則である。つまりは事実を関連づけるのは、事実それ自体である。さて天文学、物理学、化学、生理学などは、すでに実証的段階に達している。しかし社会理論は、いまだにそれに達していない。ここにコントが、実証的な社会理論として「社会学」を構想する目的があった。

産業主義

コントは『プラン』で、「社会学」という言葉は用いていない。コントが「社会学（sociologie）」という言葉を最初に用いたのは、『実証哲学講義』第四巻（1839年）においてである。『プラン』で社会理論をさす言葉として用いられるのは、「社会物理学」である。しかしそれは、実質的に「社会学」と同等の内実をもっている。したがって以下、『プラン』の段階でも「社会学」という言葉を用いることにしたい。コントが「三段階の法則」を提示したことには、社会学的に固有の文脈がある。明らかにそれは、フランス革命を媒介としている。わたしたちはフランス革命が、啓蒙主義を精神的支柱としていたことを知っている。啓蒙（enlightenment）とは本来、「光で闇を照らす」という意味の言葉である。そこから近代的な理性によって、中世的な遺制を打破しようとする主張のことを啓蒙主義というようになった。しかしそこでいう理性は、一つの形而上学的想定というほかはない。

フランス革命の最中の1793年には、「理性の祭典」が開かれている。それは理性が、神に代わる（絶対的な）存在であったことを示している。コントが社会学を構想したのは、そのような啓蒙主義と思想的に訣別するという意味合いがあった。その際かれが依拠したのが、実証主義であった。それはコントを創始者とする社会学にも、大きな影を落としている。一般に実証主義とは、理論の正当性を事実によってだけ立証しようとする態度をさす。したがってそれは、科学的態度と言い換えてもよいものである。しかし社会科学の場合、一概に実証的あるいは科学的であることがよいと

もいえない。一般に「実証的」と訳されている言葉は、英語では positive である。さしあたり positive（実証的）の反対語は、speculative（思弁的）である。しかし positive の反対語は、negative でもある。つまりは実証的であることは、肯定的である（否定的でない）ことをも意味しているのである。

ここで社会学をめぐる、私的な回想にふけることをお許し願いたい。三十代の初め二冊目の著書を出したころ、長年総合雑誌の編集長を務めた著名な編集者K氏から呼び出しを受けたことがある。氏はわたしの著書を読み、多少興味をもって下さったようであった。氏とわたしは酒席をともにしながら、四方山話をした。その折り氏が話されたことで、印象に残っていることがある。氏は編集者としての経験から、社会学者が政治的な問題に取り組みたがらない傾向のあることを指摘された。それは政治学者や経済学者と対比して、社会学者に通有の傾向という話であった（ほとんど唯一の例外として氏は、清水幾太郎の名をあげておられた）。わたしは社会学の存在理由を問う際にいつでも、このときの氏との会話を思い出す。というのも社会学者は、おしなべて価値判断に慎重であるとわたしも思うからである。ひょっとしたらそれは、社会学のスタートラインに制約されているのかもしれない。

もっともコント自身が、価値判断に慎重であったとは必ずしもいえない。実際「科学的」な議論のなかに、何らかの価値判断が忍び込んでいることはよくあることである。あるいはまたこういってもよい。コントの主唱する実証主義そのものが、一つの価値判断に相当する、と。わたしたちはそれを、三段階の世俗的側面に関するコントの議論のうちに見ることができる。すなわちコントは、第一段階は軍事的な、第二段階は法制的な、第三段階は産業的な時代であるとする。ここでは第一段階は横において、第二段階と第三段階の対比に焦点を合わせることにしよう。コントが第二段階を、法制的な時代と呼ぶのはなぜか。わたしたちはフランス革命の指導者に、法律家とりわけ弁護士が多かったことを知っている（ロベスピエール、

ダントンなど)。かれらは立法を通して、まさに社会の革命的な変化をもたらしたのである。たとえば1791年に制定された、ル＝シャプリエ法なる法律がある。

これは弁護士のル＝シャプリエの提案した、同業組合の結成を禁止する法律である。その目的は同業者の団結を禁止して、自由な経済競争を奨励することにあった（国家と個人の間の中間的団体を忌避した、ルソーの思想的影響があるともいわれる)。このような自由主義的傾向をもつ政策は、古典的な経済学の立場とも呼応していた。すなわち合理的な「経済人」が市場において自由に競争すると、神の「見えざる手」が働いて経済的均衡が得られるというのが古典的な経済学のモデルであった。しかしコントは、そこに形而上学的な想定を見て取った。そして自由主義と一線を画する、固有の思想的立場を表明する。——それが師匠のサン＝シモンから継承した、産業主義である。コントが第三段階を、産業的な時代と呼ぶことの含意はそこにある。しかし『プラン』では、それに関する十分な議論は展開されていない。わたしたちはそろそろ、コントの若き秀作に別れを告げなければならない。

人類教

『実証哲学講義』第四巻でコントは、社会学の基本的な構図を示している。社会学は二つの部門、すなわち社会の秩序をめぐる社会静学と社会の進歩をめぐる社会動学からなるというのがそれである。このうち社会動学は、「三段階の法則」が実質的な内容となっている。したがってここでは、社会静学のほうを取り上げることにしたい。というのもそこに、コントの社会観とりわけ産業的段階の社会観が鮮明に示されているからである。それは産業者を担い手とする、社会再組織のイメージと言い換えてもよい。さてコントは、個人・家族・社会という三つの水準で社会理論を展開する。まずかれは、人間の根本的な社会性に言及する。コントはいう。人間が功利的に（個人の欲求を最大限充足するために）社会状態を作った、とする見

解は誤りである。というのも集団生活は、必ずしも個人に利益をもたらすものではなかったから。功利的な発想そのものがむしろ、比較的近年の産物である、と。

社会を個人に還元できるかということは、社会学の一つの難問であり続けてきた。その際コントは、社会は個人に還元できないという立場を鮮明にしている。わたしたちはそれが、社会学の古典的な政治学や経済学からの自立に際して重要な礎石（コーナーストーン）になったことに注目しなければならない（もし社会が個人に還元できるのであれば、社会学など不要であったであろう）。もっともコントは、人間の個人的・利己的傾向を認めている。というよりもそれは、社会的・道徳的傾向よりも優位にあるとする。コントはこういう。わたしたちは自分と同様に、他人を愛するように教えられている。これは個人的傾向が、社会的傾向の指標として働いていることを示している。もし個人的傾向が優位でなければ、社会生活そのものが成立しないであろう、と。コントは社会的傾向の使命を、個人的傾向を和らげることに求めている。つまりは二つの傾向の中和ということが、そこでのコントの基本的立場であった。

これは経済学の開祖アダム・スミスが、道徳心による利己心の制御を主張したことと重なっている（『道徳感情論』）。コントは家族についてはこういう。家族はたんに、社会の要素にとどまらない。むしろ家族は、社会の模範たるべきである、と。そこからかれは、社会有機体をめぐる自説を展開していく。社会有機体とは社会を、生物有機体に類比するものである。すなわち生物の各器官が機能分化しつつ相互に連携を保っているように、社会のメンバーも独自の行動をとりつつ一致協力しているというのがそれである。社会有機体を構成する基本的な原理は、分業と連帯である。というよりも分業＝連帯というのが、そこでのコントの社会観の核心である。社会がより広域化、複雑化するほど、そのような和解はより顕著になるとかれはいう。もっともコントは、社会の専門分化が有害な結果をもたらす可能性を認めている。それは分業の進展によって、社会的な連帯が解体す

る危険性をさす。

ここでは後年、デュルケームによって展開される議論がほぼ先取りされている。旧組織の破壊の過程では部分の精神が、全体の精神を凌駕していた。しかしいまや、全体の精神が部分の精神を凌駕しなければならない。これが社会有機体説に結実した、コントの時代認識であった。そのような時代認識ははたして、フランス革命後の一時代にしか通用しないものであろうか。コントが社会学を創始して、二百年近くが経つ。この間社会学者は、明け暮れ社会的秩序の問題に直面してきた。その意味ではコントは、名実ともにわたしたちの先駆者であったといわねばならない。それはコントの社会学が、今日の社会学の水準から見て結構粗雑に映るということとは別問題である。最後にコントの生涯を振り返る場合に、一つだけ触れておくべきことがある。——それはコントが、後年人類教という宗教を創始したことである。それはクロティルドの死の翌年のことであり、かの女は人類教の女神となった。

そしてまたコントは、人類教の祭司となった。というと突拍子もない話で（かれは「三段階の法則」に反して、実証的段階から神学的段階に戻ったという冗談もある[7]）、社会学史であえて取り上げる必要もないように映る。コントが後年、宗教熱に取り憑かれたことの評価は難しい。ただかれが、「人類」という概念に行き着いたことは興味深い。たしかにそれは、実証的段階において（神学的段階における神に代わる）至高の概念になるかもしれないからである。人類教は愛を原則として、社会に「秩序と進歩」を実現しようとするものであった。実はそれは、意外なところに痕跡を残している。コントの思想ならびに宗教は大西洋を隔てて、ブラジルの建国運動に大きな影響を与えた。ブラジルの国旗に「秩序と進歩（ordem e progresso）」という標語があるのは、コントの人類教に由来している。それはコントが、今日の社会学者の範疇に収まり切らない人物であったことを再び示している。

社会学において「今日だれがコントを読むだろうか？」というように、経済学においても「今日だれがスミスを読むだろうか？」といってもよいのであろう。しかし同じ開祖的な位置にあるといっても、コントとスミスの間には大きな隔たりがある。すなわちスミスの場合、かれの理論の骨格は以後の経済学のなかにそれなりに継承されている。しかしコントの場合、必ずしもそれはそうではない。というよりも社会学の場合、何が中心的な理論であるかということ自体が不分明である。そのなかでコントの位置は、ますます不明確になっている。その意味ではコントは、哀しき創始者といわねばならない。ただかれが、紛れもなくわたしたちと同時代の社会学者であることをここでは確認したかっただけである。——コントがクロティルド・ド・ヴォーと知り合った年、同じパリの空の下でマルクスとエンゲルスは運命的な邂逅をしていた。わたしたちは次に、この二人を取り上げることにしよう。[8)]

注

1） プラトン以来の、民主制について懐疑的な、西洋政治思想の知的伝統をいう。

2） 著者は著書『社会学史』を構想しており、そこにジンメルを扱う章をおく予定である。「綜合社会学」と「形式社会学」については、そこで扱う予定である。

3） 本稿は、上記の『社会学史』の第2章に相当する論稿である。同著の「はじめに」と第1章「アリアドネの糸——前史」は、すでに本誌『学術文化紀要』第10号（2007年）に発表している。ここは、その「はじめに」をさす。

4） 上記の『社会学史』を念頭においている。

5） 上記の「はじめに」で取り上げている。

6） 上記の『社会学史』を念頭においている。

7） 奥井智之『社会学』（東京大学出版会、2004年）pp.281-282参照。

8） 上記の『社会学史』において、コントに続いてマルクスとエンゲルスを取り上げることをさす。